

# 患者が笑顔を取り戻せるような 最高の歯の被せ物を目指して研鑽を積む

噛み合わせなどの機能性と、見た目の審美性。その両方が求められる歯科技工士という仕事は「究極の職人」だと、長縄社長は考える。歯科技工所『ティースクリエイトナガナワ』を開業して約8年、患者に心から満足してもらえよう、粉骨砕身で仕事に取り組んできた。その歩みと、仕事にかける熱意を、俳優の村野武範氏が伺った。

大きなプレッシャーを感じながら  
苦勞に負けず、勉強を重ねる

——歯科技工士は、なかなか特殊なお仕事ですね。長縄社長は どうして、このお仕事に就こうと思われたのですか。

もともと手先が器用で、ものづくりの仕事に就きたいと思っていました。それで高校生の時に色々な仕事を調べて、目にとまったのが歯科技工士でした。かなりの精巧さを求められるので作り甲

斐がありそうだし、白衣を着られるのは格好良いなって（笑）。それで専門学校に2年間通って国家資格を取得し、卒業後は県外のラボで働き始めました。

——専門職ですから、資格試験は ずいぶん難しいのでしょうか。

いえ、実は合格率約9割という、比較的簡単に取得できる資格です。ただ、資格を取ると、その資格でもって働くというのは全く別の話なんです。私は学校での成績は良いほうだったんですが、

働き始めて最初のころは思うような精密な物が作れませんでした。いくら微調整を繰り返しても、噛み合わせがぴったり合わなかったり、元の歯と色味が違ったりするんです。でも作らないと仕事は終わらないし、ちゃんとやらないと社長には注意されるし……プレッシャーが凄かったですよ。ラボとしても、ものをつくらないと収益が出ないわけですから、ちゃんとできあがるまで日付が変わっても働き通し。ただでさえ神経を使う細か

代表取締役社長

## 長縄 洋幸

岐阜県各務原市出身。高校生のころに歯科技工士を志し、県内外のラボで経験を積んだ後、29歳で『ティースクリエイトナガナワ』を開業した。約20年のキャリアを持ち、一般的な銀歯からセラミック、インプラントまで様々な被せ物に対応するが、「まだ勉強しなければならないことが山ほどある」とのこと。日々仕事と研鑽に励み続けている。



株式会社

ティースクリエイトナガナワ

岐阜県各務原市各務おがせ町 5-135-1

URL : <http://naganawa.dentalmall.jp/>



## 歯科技工士に求められる繊細さ

「歯を抜く前とまったく同じ」「何でも噛めるようになった」——患者からそんな喜びの声を聞けるのは、本当に稀なことだと長縄社長は言う。もとの歯とまったく同じ被せ物をつくるのは、ほぼ無理と言っていくくらいの難題だ。なにせ人体の一部、つまりは生きていたものを作り物に置き換えるのだから、違和感が残るのは仕方のないことだろう。その違和感を極限まで減らすのが、歯科技工士の腕の見せ所である。歯並びは一人ひとり違うし、違和感を覚える程度も人それぞれ。特に若い人は神経が敏感なので、ほんの

わずかな違いにも違和感を覚えるという。さらに歯には、人の見た目にも大きく影響する。何度も画像と見比べて被せ物の色味を調整しても、いざ患者さんに装着してもらうと全然色が違ったりするというから、歯科技工士の仕事というのは繊細なことこの上ない。しかし被せ物は高価なものだから患者の要望がシビアなものも当然で、だからこそその要望にばっちり応えられた時の喜びは何物にも代えがたい。「どんなに大変な仕事でも、患者様に満足してもらえたら次も頑張ろうと思える」と社長。その努力を応援したい。

い仕事なのに、長時間働くので肉体的な疲労も溜まります。そんな風なので、10年働き続けられる人は資格取得者の半数以下だとも言われているんですよ。私も実際、2年で体を壊しましたからね。

——それでも社長は、辞めようとは思われなかったわけですか。

途中で辞めるのは格好悪いと思いましたし、根底には自信があったんだと思います。自分にはやれるはずだ、と。それで地元のラボに移ってさらに6年ほど勉強させていただき、29歳で独立してこの『ティースクリエイトナガナワ』を立ち上げました。それまでプレッシャーを感じるばかりだった仕事に対する意識が変わったのは、独立してからですね。

### 「究極の職人」として

#### 患者に喜ばれる仕事を追い求める

——意識が変わったとは、どのように？

勤めていたころはラボにこもりっきりで、自分がつくった被せ物をどんな患者様が使われるのか、直接目にする機会がなかったんです。でも独立してからは、歯科医院に出向いて被せ物を装着する場面に立ち会う機会が増えました。すると

自分の仕事の成果がダイレクトに分かるんです。どの部分を微調整したからしっくりはまったのか、逆にまだ手を入れる必要があるのはどこか……それを患者様から直に伺って、改めて「自分はこんなに精巧なものを要求されていたんだ」と思いました。だからこそ、患者様に納得していただけるよう、もっと腕を磨かなければと意欲が湧いてきたんです。

——いっそうプレッシャーを感じるのではなく、むしろ背中を押されたと。

努力の成果を直に見られるのは、やる気につながりますよ。まあそれでも、大変なことに変わりはないのですが、自分の仕事なんてたいしたことない、と謙遜する人もいるでしょうが、私は胸を張って「こんなに大変で難しい仕事はない」と言えますよ（笑）。髪の毛1本ぐらいの小さな物を上下の歯で噛んだ場合でも患者様は違和感を覚えますし、前歯を被せ物にする場合は他の部分以上に見栄えに気を配らないといけません。ものを噛むという機能性と、見た目の審美性。この二つを両立させ、患者様一人ひとりに合わせた被せ物をゼロからつくりあげる歯科技工士という仕事は、究極の職人だと私は思っています。

——話を聞けば聞くほど、ご苦労の多いお仕事ですね。だからこそ、やり甲斐も大きいのでしょうか。

時間も手間もかけてつくった被せ物を装着した患者様が、満足そうな顔をして下さる。それだけで、また次の仕事も頑張ろうと思えます。もっとも、心から満足していただけることは稀なのですが。いくら精巧に作っても、元の歯と全く同じというわけにはいきませんからね。私はこの仕事に就いて20年近くになりますが、未だに十分な技術を持っているとは思えないんです。いくら勉強しても果てがない、と感じます。

——まさに職人ですね。常に高みを目指して努力をされているわけだ。

今後はもっと勉強に時間を割けるよう、働き方を考えたいと思っています。独立してから約8年、目の前の仕事をこなすだけで精一杯でしたから、今後のためにもっと腕を磨かなければ。被せ物をはめたことでご飯を美味しく食べられるようになった、大きく歯を見せて笑えるようになった。そんな風に患者様に幸せになっていただけるよう、これからも仕事に励みたいと思います。

(取材／2016年10月)



### After the Interview

#### 村野 武範

「肉体的にも精神的にも負担が大きいという、歯科技工士のお仕事。それでも長縄社長が今まで続けてこられたのは、いつもあたたかく応援して下さる奥様のお陰なのだから。仕事に熱を入れすぎると社長を、いつも心配しておられるのだそうです。くれぐれも無理はなさらずに、今後も頑張ってくださいね」

